

使徒言行録 13 章 42-52 節 「救いは地の果てまで」

ピシディア州のアンティオキアに行き、会堂でパウロは奨励をしました。それは、イスラエルの民の長い歴史です。そしてダビデの子孫から救い主が生まれ、神の救いは初めから神の計画の中にあったこと等を明らかにしていったのです。パウロが語った真の救いとは、神に義とされその救いを受けるのはただイエス・キリストを救い主として信じる信仰によるのだということでした。そこでパウロの説教を聞いていた人々の反応はどうだったかというと、彼らは深く心を動かされたのです。そして次の安息日にもまた来て同じことを話してくれるように頼みました。それが今日の箇所です。パウロの説教は、異邦人たちに特に喜んで受け入れられていき、パウロの伝道活動の実りは大変大きなものでした。

しかしこれを素直に喜ばない人たちがいました。「しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した(45 節)。」多くの異邦人が救われることを受け入れられないユダヤ人たちにとっては、パウロの説教も、それが多くの人たちに受け入れられている盛況ぶりも、我慢ならないことであつたのです。本来ならば自分たちの神の言葉ですから、素直に聞き入れれば良いのに、反対に「ひどくねたんだ」というのですから、人間は何と自己中心で情けない心を持っていることでしょう。彼らはパウロ自身ではなく、パウロが宣べ伝えたイエスを口汚くののしつたのです。これはパウロとしては何とも我慢できません。そこで 46 節です。「『神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。』」この出来事が、世界宣教への一大転換点となっていきました。パウロとバルナバは、さらにイザヤ書 42 章 6 節を引用して続けます。「異邦人の光」として地の果てまで救いをもたらす人物の出現・救い主を預言しました。これを聞いていた異邦人たちは喜び、主の言葉を賛美し、信仰に入つたのです。そして主の言葉はこの地方全体に広まって行きました。しかし、ユダヤ人たちはますます心を硬化させていったのです。自分たちの力ではこのパウロとバルナバの二人を追い出すことはできないと判断して、町の上流階級の信心深い貴婦人たちや有力者たちにパウロたちのあることないことを告げて扇動し、迫害してその地方から追い出してしまったのです。彼らは、きっと町の住民たちが自分たちユダヤ人を見下したり、自分たちの影響力が後退するのを恐れて、そのような行動をとつたのでしょう。彼らは自分たちの評価を気にして見栄や欲のことしか考えることができませんでした。それが神の前にある人間の大きな罪であることに気づくには、どうしたら良いのでしょうか。そこにこそ神への信仰が必要なのです。私たちの信仰は見えるものではなく見えないお方に目を注ぐことです。

神の御言葉はたしかに信じる者に救いを与えますが、一方で人間に躰きも与えます。これは神の側に不公平があるものではありません。イエスの救いの福音を受け入れるか退けるか、人間は皆その選択と決断の前に立たされているのです。誰であれ、その応答は自由なのです。どうか主の救いを受け取る人たちが、一人でも多く増えていきますようにと心から祈り願っております。